問題解決から始めないイノベーションアプローチ
ビジョンを深化するストーリーメイキング（実践編）

サンプルプロジェクト「新しい家事の意味」プロジェクトレビュー／サブテキスト

プロローグ

移動や接触が制限された結果、様々な面で急激な変化に迫られています。自宅で過ごす時間が長くなり、「家事」の位置づけも少なからず変わってきているのではないでしょうか？　共働きが当たり前となった昨今の流れを加速する「家事」の変化はこの先、どうなっていくのだろうか？　私たちはこの問いからプロジェクトをスタートしました。

テクノロジーでスマート化する。サービスを積極的に利用して外部化する。忙しい日々、知恵とコストをフル活用して家事をやりくりしている人によれば「義務であること」「イレギュラーが発生すること」がどうしても許せない。だけどそこだけがなくせない。一方では、ものによっては、たとえばアイロンがけや食器洗いは嫌いじゃないとも。ひょっとすると義務から解放され、不測のタスクにならなければ、家事の意味は思いもしなかったものに変わるのかもしれない。

これらの気づきと仮説を基に「新しい家事の意味」を考えるための物語を二編、描きました。舞台は 2030 年ごろの日本のどこかにある、入居者は家事をしなくてもいい生活が送れる集合住宅兼複合施設「クリーン・ヴィレッジ」がある世界。共通して家事のやりくりや家事との距離感に悩むそれぞれの主人公は、家事を手放し、何を得て何を失い、果てにどんな「新しい家事の意味」に出会うのでしょうか。この物語を手に取っていただいたみなさんそれぞれにも「新しい家事の意味」を考えていただくために、物語に込めた意図や、家事に向ける新たな視点を生むためのヒントとして解説をつけました。合わせてご覧ください。

音のある世界

音のある世界

うるさいを五月蠅いと書いた人はすごい。

家族が生み出す音は私の集中を妨げる。

夕食の準備をしていると、
「おかーさーん、ねー、こっちー、ねえー（ガシャン！）わーーん！」

朝慌ただしく準備していても、
「この服、やあだーー、今日も赤のやつがいいーー（ブチブチ）」

仕事をしていると、
「（幾ばくかの水音の後に）ねーー、おかーさーん、びしょびしょーー」

それに重ねて、最近在宅勤務解禁になった夫の発する音も私のイライラを助長する。
「結衣ー、これとりたいんだけど、はさみってどこにあったっけ？」
「あれ、ゴミ箱いっぱいだよ。ここのゴミ捨てないの？」
「なんだよお前。明日休みか！ えー、今日は無理だよ、だって嫁と子ども家にいるもん、わはははは」

おなかを痛めて産んだ子なのに、世界で一番私を理解してくれていると思って結婚したのに、どうしても何かを発するたびにうるさい、邪魔だと、思ってしまうのはなぜなんだろう。

音のある世界

時刻は夜の 7 時。

久々に行ったオフィスで、部長に「古垣さん、最近クオリティ下がってるね。在宅、効率上がってないの？」と言われ、イライラしながらお迎え、立ちこぎしながら献立検討、買い物。帰ってきてからは、明日も同じ服を着たいとごねる子どものために洗濯機を回し、大きめの家事音で夫には無言の圧力（意味はなかったけど）。

あー、今すぐに音のない世界に行きたい。

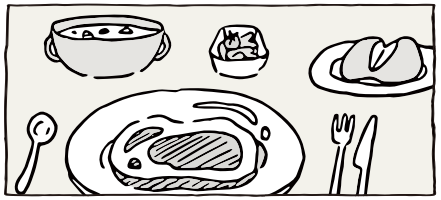
「どうしたもんかね」と、やたら大きな音を立てて回る、油汚れが日々堆積するキッチンの換気扇の音を重ねるように独りごちた。

……

それから 3 カ月後、私たち家族は「< 入居者様向け > Clean Village での楽しい過ごし方」というハンドブックを手に、「Clean Village」と書かれた、やたら白く光り輝く門の前に立っていた。

それまで可能な範囲で「職住近接」を意識してきた私たちが、通勤に 1 時間もかかるこの村に移住したのは「キャンプがてらここの体験会行ってみない？」という夫の一言がきっかけだった。会社の同僚が体験会に行き、とにかくハイテクなその様子を興奮気味に伝えてきたらしい。

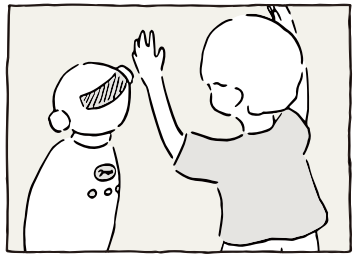
「とにかくハイテクなんだって。スタッフさんとかロボットが全部してくれるらしいし。俺もロボット好きだけど、何より結衣がもっと仕事に集中できるようにと思ってさ」。
夫の恩着せがましい台詞はそこそこに、私はそれ以上にサイトにでかでかと書かれている「家事ストレスからフリーになり、静かな生活が手に入ります」というフレーズに胸が躍った。



丁重で、でも無機質な担当さんとのメールを経て体験会に行き、土日だけお試しで泊まってみた。「すごい」という単語を100回は言っただろう。

ゴミはそこら中にあるパイプに入れるだけだし、落ちている髪の毛なんか1度も見なかった。料理はダメなものを伝えておけば、セントラルキッチン経由で温かい食事がダイニングテーブルに。洋服もボックスに入れておけば、勝手に洗濯されて棚にしまわれる。子どもの遊び相手も、夫の趣味談義にもスタッフがいてくれる。

「これでXXX円は私が出世すれば良い話だな」
日曜日の朝にはもう心が決まっていた。



実際に住みだしてみると、パンフレットに書かれていたとおり、「静かで」「ストレスない」生活は直ぐに手に入った。掃除、洗濯、料理、子どもの送迎、そのほかの家事全部、何なら子どもの遊び相手まで。全部機械か時々現れる白い服を着たスタッフがやってくれる。

母の姿を見せる意味で、土曜日だけ子どもとご飯を作るようにしているけど、ただ行為としてやってみるだけ。準備をする・片付ける・しまうなんて一切しない。だって汚したのは私じゃないし、こんな面倒くさいことわざわざやる必要ある？

平日にやらなければいけない家事がなくなったことで、頭のリソースをすべて仕事に傾けられる時間が相対的に増えた。仕事には全力で打ちこめるし、残業だってし放題。部長には小言を言われずにすんで、独身時代に戻ったみたいで幸せこの上ない。

「カチカチ」
あ、またやってしまった。今までやってたのに気づいてなかったのか、マウスを鳴らしながら、PC のデスクトップを整理する癖もついた。

……

移住当初、数カ月は「この世の幸せを全部詰め込んだ」ような生活だった。
仕事だけに打ち込み、先んじて対応してくれるスタッフやロボットのおかげで、わざわざ私に話しかけることもなくなった家族を、うるさいと思うこともなくなった。でも、そんな生活は長くは続かず。一番最初に音を上げたのは私だった。

引っ越しと時を同じく新しい事業部の立ち上げリーダーに抜擢され、昨年までの頑張りも認められ昇級。ここはなんとしてでもよいサービスを作ろうと必死に仕事をした。

でも、オンラインMTGでチームメンバーを大声で叱責してしまったり、メンバーから上がってきたデザインにひたすら赤入れしてしまったり、最初から兆候はあったんだと思う。

そして、ついにというか、決定的な出来事がさっき。
「君はチームのためを思っていってくれてるんだと思うんだけどさ、もう、古垣さんのチームではしんどいって言うんだよ、みんな」

自分でも全然気づかなかったが、マウスを同じリズムでカチカチ鳴らしているようで、それと怒られたことが毎度リフレインしてしまうみたいで、仕事が手につかなくなったメンバーもいるという。

「なので、君は降格だね」

……

「ッグス……ズズ、ズズズ」

悔しさと悲しさがごっちゃになって、自分の部屋で泣きに泣いた。大声で部長に刃向かっていたようで、そのやりとりを聞いていた夫からは「すごいうるさいのな、お前」と言われて、むしろうるさかったのは私だったんだと思った。

泣きすぎて頭が熱くなり、何も考えられなかった。

音のある世界

後任者に簡単な引き継ぎをして、2週間ほど仕事を休むことになった。
日がなリビングのソファーにぽつんと座っている。

あれほど照りつけていた西日がリビングから消えようとしている。
この時間であれば、子どもも夫も自宅にいるはずだが、動いている音も気配すらも感じられない。

「パパー」
「(シーン)」

「たかちゃーん」
「(シーン)」

私のうちはいつからこんなに静かになったんだろう。

……

気晴らしに、大学時代の同期・ゆりと会うことにした。

待ち合わせのカフェのテラス席でえらく憔悴した顔をしていたらしく、「ちょっと大丈夫？ 顔真っ白」と笑いながら言われたが、Clean Village に引っ越してからの顛末を話していくうちにゆりの顔はみるみる悲しそうな顔に変わっていった。

「確かにねー、ほんと、うるさいわよね。家族って。だって、今日も出て行くとき『ゆりさん、今日は何時に帰ってくるの？お夕飯は焼き魚がいいわ』とか、『Switch 買って！買って！』っておもちゃの山崩しながら言うし（笑）。やらなくてもいいならしないわ、何その努力って感じよね」

「でも、どうなんだろ。家事をやらなくなったら、逆に毎日が単調になっちゃうのかな」

……

ゆりとわかれ、ぼーっとしたまま電車に乗り、家に帰ってきた。

音が一切聞こえないリビングで、誰も手をつけていない、湯気を上げ続ける食事を見たらまた泣けてきて、何も食べずに自室のベッドに横になった。

泣いたまま寝てしまったようで、降り続ける雨の音と、スマホのヴンッというバイブ、光った画面に気づいて起きた。

何の気なしにのぞいてみると、スマホの画面には「Clean Village からとっておきのお知らせ」とある。画面を開くと、そこにはこうあった。

「Clean Village で“ゆとり”を取り戻しませんか
このメールが送られたあなただけの特別ご招待。
Clean Village で思い詰めすぎたり、生活が張り詰めすぎたら、
「家事オプション」を試してみませんか？
いきなり無駄のない生活になるとどうしても、
周囲がそのスピードについて行くことができずトラブルになりがちです。
家事オプションは Clean Village への引っ越し前に日常的に行っていた家事を、
趣味的に行う入居半年たった方向けの特別プランです。
ご希望以前のご自宅の様子を、自宅内に特別再現。
ご自身のやりたい家事に自由なタイミングで取り組んでいただけます。
申し込みはこちらから」

「これで昔の生活に戻れるなら……」

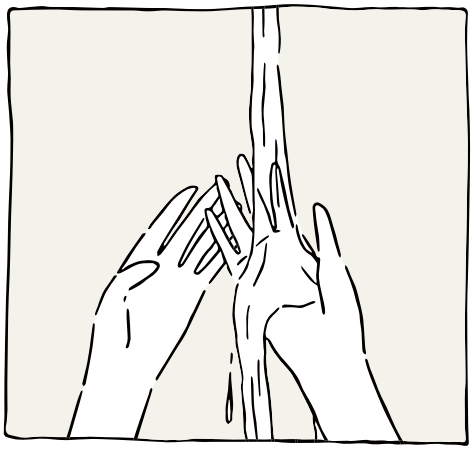
ーー直感的に申し込みのボタンを押していた。

……

リビングにおりると、そこには雑然とした“我が家”が広がっていた。子どもが広げに広げたおもちゃ、シンクには重なった使用済みの皿、大雨に降られっぱなしの洗濯物。

「なーんだ、これでいいんだ」

音のある世界



びっしょびしょになった洗濯物を取り込み、洗濯機に押し込み、着ていたシャツの腕をまくって、たまっていた食器を片付ける。「たかちゃん、そんなに散らかさないでよ！もう」と言うのも忘れない。

食器洗いは久しぶりで、手に当たる水が心地いい。

手がおぼつかなくて「ガチャガチャ、ガシャン！」お皿を落としてしまった。
よかった、割れてない。

「ママ、だいじょぶ？」

子どもが心配そうにお皿を差し出してきた。
夫も後ろから「おい、大丈夫か？代わる？」と声を掛けてくる。

「大丈夫よ、うるさくしてごめんね」
思わず、泣きそうになってしまった。

- end -

音のある世界　解説 1/2

「思い通りにならない」家事への取り組み方を変えるには

家事は、不確定要素の塊である。その一方、例えば皿洗い時は無心で手を動かせたり、洗濯を干す際には少し整った気分になったりと、気持ちを整えるマインドフルネス的行為の一助ともなり得る。「思い通りにいくようになった際の家事は、楽しいものに変化するのではないか」という期待と未来の生活への示唆を、一つの物語にまとめた。

今回、思い通りにいかない状況を表現するテーマとして「音」を用いた。冒頭では自分ではない第三者（＝家族）が生み出す思い通りにならない状況を、中盤ではうまくいっている状況として音のない静かな世界を、締めとして主人公・結衣がオプションプランへ申し込みすることによる日常の回復を、音によって表現している。

結衣は音がないことを、自身で状況がコントロールできている、良い状態と定義し、音にまみれた世界から抜け出すために家事から解放された状態（＝クリーン・ビレッジ）を選んだ。しかし、誰かに乱されないという心地よさは、徐々に彼女が家事をすること、そして家事を行う環境によって育まれていた「マインドフルネス」の状態を壊していく。

彼女は解決策として、クリーン・ヴィレッジから見透かされたように送られてきた「家事オプション」を選択したが、改めて物語を冒頭から見てみると、違う解決方法もあったのではないだろうか。違う視点から物語を見てみると、別の視点がみえてくるのではないだろうか。

音のある世界　解説 2/2

新たな問いを考えるための 3 つの視点

これらのストーリーから、どのように新たな視点を見いだすことができるだろうか。問いを検討するために、以下の視点で物語を見てみよう。

〔1〕広げる：システムや環境から、物語を捉える

クリーン・ヴィレッジは、一つの共同体としてエコシステムを形成している。家事を生み出す人、それを解消するためのシステム。では、「義務としての家事がなくなった」時、この共同体のそれぞれの機能はどう変化するだろうか。

〔2〕狭める：主人公の一つの感情やそれによって起こる行動を中心に考える

音によって実は自分を律していた主人公・結衣。では、自分ではコントロールできない、思い通りにいかない家事にスムーズに対応するために、音を用いてサポートをするとしたら、どんなサポートができるだろうか。

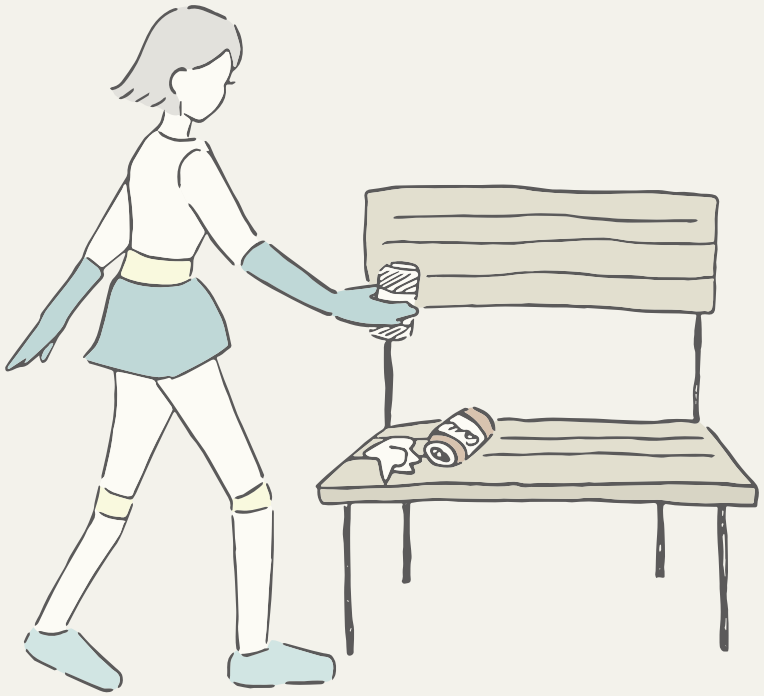
〔3〕入れ替える：主人公の立場を他の登場人物と変えてみる

今回「キャリアの向上を目指しながらも、家事はおざなりにしない共働き女性」を義憤を持つ主人公として設定した。家事分担の負担が大きくなりがちな女性を主人公にしているが、これが夫側になったとき、夫は違う方法で解決を試みるだろうか。

そのほかにもさまざまな視点で物語を見ることができる。別の視点で見ると、その先にはどんな世界が広がっているだろうか。

© 2020 INFOBAHN DESIGN LAB.

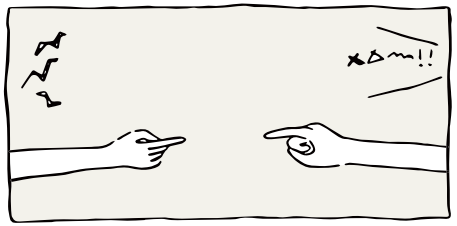
箱舟

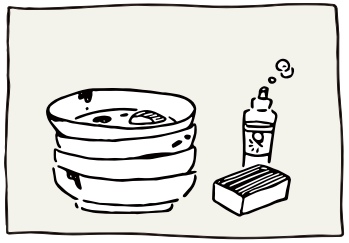


箱舟

母の口ぐせは「忙しい」だった。私のうちは当時でも珍しくなりつつあった典型的な家父長制で、もちろん専業主婦。べつに暴君だったとかそういうのではなかったけど、外資系のサラリーマンで夜遅く、休日遊んでもらった記憶もおぼろげな父に不満ひとつ漏らさず、私と兄を実質母子家庭状態で育てながら、炊事、洗濯、掃除、サボったところは見たことない。父を立てながら私にも優しくって、完璧？　だけどどこかいつも張りつめていて、たまに溜息漏らすみたいに「忙しい」とつぶやいた。好きだけどああはなりたくない、高校生くらいのときにはぼんやりと思ってた。

生い立ちの反動か、私にとって「家事」は最初から、いかに生活から追いやるかの対象だった。美大出てデザイナーとしていまの事務所に就職して、今年で 10 年。入社 2 年目で、いまでは珍しくもない新種の感染症（Covid-19）で世界中が大騒ぎした結果、私の社会人生活でオフィスに通ったのは最初の一年だけで、以来ずっと在宅で働いてる。学生時代からの一人暮らしはいわゆるミニマリストってやつで、極力家事のタネを減らし続ける日々。3年前に結婚した夫とはそのあたりの価値観がピッタリはまった。彼も在宅ワーカーなので二人暮らしになった分家事は増えたのだけど、基本は「分担」、食事をはじめできる限りの「外部化」、かなり頑張ってたと思う。おかげで二人とも無理なく仕事に集中できたし、趣味の時間もある程度取れてた。地元の友達とのチャットで聞かされる家事の愚痴とか、大変だね～と他人事で済ませられてたし。





それでも限界はある。私も彼も、同業ゆえに繁忙期が重なりがちで、そのたびに分担が崩れる。ミニマリスト、家事は遠ざけるけど部屋が汚れてるのも耐えられない。滅多にケンカしない私たちで、家事への距離感が結婚の決め手のひとつなのに、揉めるのも家事が原因だったりする。逃れらないの……？　と愚痴をツラツラ AI ボットに聞かせてたら、教えてくれたのが「クリーン・ヴィレッジ」。『入居者（ルビは「じんるい」とある）を家事から解放する』。マンションポエムならぬ強烈なアジテーションに惹かれ、見学した日に入居を決めたのが半年前の話。

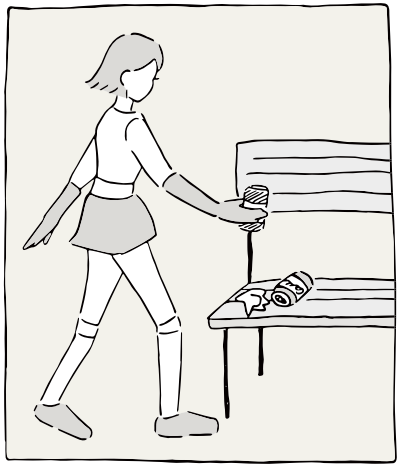
……

クリーン・ヴィレッジは都心からクルマで 1 時間ほどの郊外にある、インフラ、通信、消費財、各業界のイノベーターが集ったコンソーシアムによる「家事のない暮らし」を掲げたコンセプトの実証実験集合住宅。2020 年代は例の感染症で幕を明け、移動や接触の制限からあらゆる物事が問い直された。医療、働き方、観光、外食、教育、娯楽、急激な変化はオンラインとオフラインの融合を加速し、共存するものもあれば、上書きされたものもある。議論は喧々諤々あったけど、どちらかというと世の中は効率化・合理化を選択している。それだけ聞くとちょっと冷たい無機質な響きだけど、テクノロジーと倫理がすったもんだしたのは「時間」と「自由意思」。ざっくりいうと「自由で縛られない時間が人の幸福度を上げる」という結論を導き出した。クリーン・ヴィレッジがそのヴィジョンに従っているのは言うまでもない。炊事、洗濯、アイロンがけに、ゴミ捨て、望めばベッドメイクもしてくる。仕事も楽しい、趣味も楽しみたい、私たち夫婦も飛びついたというわけ。

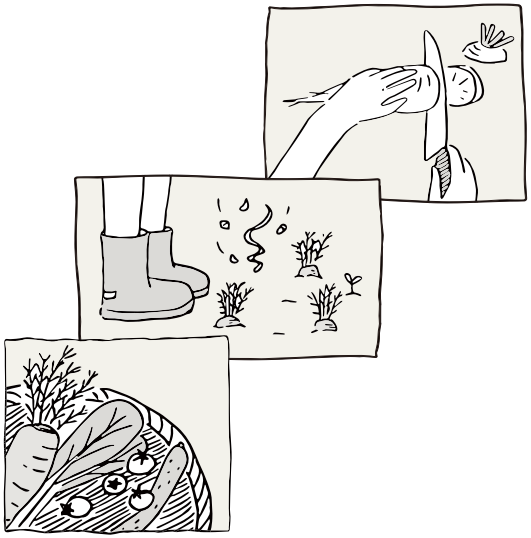
箱舟

ヴィレッジでの暮らし。食事は三食ヴィレッジで済ませられるし、洗濯物もかごに入れておけばクリーニングに直行して、プラン次第で仕上がりも自由自在で帰ってくる。期待以上の解放感で、やりたい仕事、やりたい趣味、一日の時間割がムダなく正確に刻まれていく。ワーカホリックにはなりたくないので、日曜日、ふだんはお互いの在宅ワークを尊重し合う私と夫は、入居者向けの公園、ヴィレッジ・パークで「ぼーっとする」時間をルーティンにしてる。余白だって予定通りに自在につくれるのだ。

今日もヴィレッジ・パークのベンチで、サイクリング帰りの夫が買って来てくれた老舗珈琲店のカフェオレを飲む。パークには、というかヴィレッジにはいわゆるゴミ箱がない。飲み終えたら、ベンチでも芝生でも、置いとけばいつの間にかなくなっている。部屋には大きめのダストシュートがあって、包装紙も生ゴミも、ゴミが出たらひとまず入れる。分別もリサイクルもダストシュートの先でやってくれるので、それでおしまい。あれ、ほんとに大丈夫かなって、ゴミ処理がいちばん戸惑ったかもしれないけど、でもまあ半年たったいま、迷いなくベンチに置いて帰ってきたところ。たまに「罪悪感ないの？」と友人に聞かれる。特にない。だってちゃんとコストはかけてるし、私たちの家事を代行する人やロボットがいて、エコシステムが回ってる。誰にも迷惑かけてないんだからいいよね？……と、昨日まで思ってたんだけど。



箱舟



3年ぶりに私の実家に帰省した。結婚式以来。不義理かなあと思いつつ、家事の匂いが染みついた家に帰るのはなんとなく億劫で。ちょうど3年前にポートランドから兄一家が帰国していまは二世帯住宅してるってのもあって、安心して任せてたのもある。その兄一家に新たな生命が誕生したというので、お祝いで渋々。そしたら、我が家にもゴミがなかった。正確に言うと、実家だけじゃなくて町全体で、ゴミが出ない生活してた。ビックリした。日本の片田舎に、サーキュラーエコノミーが実現してた。

もうかなり昔の話だけど、ポートランドはオランダなんかと一緒にサーキュラーエコノミーのはしりとして日本でも注目されていた。そこに10年もいた兄が持ち込んだノウハウを、町に広めたのは、母だった。兄と私が自立し、父も定年退職し、彼女は彼女で家事から解放されて、どうしてるかなと考えたこともあった。そしたら彼女は変わらずに家事をしてた。地産地消、町で採れた野菜が町の家庭で町のレシピで食卓に並び、余った部分はまた町の野菜の肥料になる。衣類はおさがりがアップサイクルされて、書物は家々の本棚をめぐっているらしい。3Dプリンターとブロックチェーンが技術的な下支えになってて、ちょっと信じられない。各家庭の知恵と技術が、ムダに買わない、ムダに捨てない世界を形作る。台所に立つ母の背中は子どものころと同じに見えるけど、彼女の家事は、家の外につながっていた。

ほんの一部分を見聞きしただけだし、いろいろ失敗や課題もあるだろうけど、打ちひしがれてしまった。兄にヴィレッジでの生活を聞かれて、お茶を濁してしまった。私は家事に翻弄される（ように見えた）母を見て、家事に対する忌避感を抱き、あらゆる手段で遠ざけ、理想の生活を送っている。何の不満もない。なかった。けど、私は私の理想を手に入れるためにお金を使って、多くの人や資源を消費している一方で、母は家事を通じて社会とつながり、地域の持続可能性に貢献している。悔しいのかな？　なんだろう、もうよくわからない。とりあえず、寝よう。

箱舟

22 年前も前に書かれた日記を見返すと、端々に現れる語彙や筆致の幼さに赤面する。しかしこの日記は、国立国会図書館に記念碑的に所蔵されている。私、鷲見恵はこの日を境に研究の道に入り、ある種の革命を起こした。端的に言えば、家事をなくした。日記に書かれた日、家事と社会を接続したパースペクティブは私に一定の衝撃を与えたが、当時の、いやいまに至るまで、私はやはり家事をしない生活を選んだ。従前のクリーン・ヴィレッジが要した多大なコストを失くすのが私の研究のテーマだった。現在、クリーン・ヴィレッジの建物には埃が発生しない。毛織物、食べかす、埃の基となる物質を排除する衣服や食事を開発し、仮に塵が発生しても溜まらない空流を保っている。ほかにも食べられる包装、汚れや匂いのつかない服、家事の原因とも呼べる事象をできる限り排除してきた。副次的な効果としてクリーン・ヴィレッジではここ 10 年、感染症患者をひとりも出していない。決して外界と隔離しているわけではないのだが、家事の根幹治療が行われたここでの生活で身に宿る細菌がそうさせるのか、あらゆるウイルスへの耐性があるのではと、研究の依頼が殺到している。昨年発生した厄介なウイルスに苦戦する世界を救う一助となれれば幸いだが、このクリーン・ヴィレッジが「箱舟」と呼ばれるのは少々、気恥ずかしい。（2050 年 6 月、研究室にて）

- end -

箱舟　解説 1/2

家事がなくなって、家事の意味が生まれた

家事、と聞いてどんなイメージが思い浮かぶだろうか。程度の差はあれどあらゆる物事に多様性が生まれ、受け入れられている昨今、家事の捉え方にも個人差が出てきている。共働きを前提とした夫婦での分担、炊事・洗濯・掃除、それぞれに外部化可能なサービスも充実してきた。それでも「お母さん」の印象も一方では根強く、根深い。そんな現状を主人公とその親の関係性に投影した。

物語を描く際に、銀行の基幹システムリニューアルプロジェクトみたいな精緻で徹底したしたWBS（Work Breakdown Structure）で管理して無駄を排すなど、あらゆる工夫をして家事を遠ざけている方のインタビューを参照した。実際行きつくところまで行きついて、家事に新たな意味を見出しつつあるのを見聞きし、ならばと、家事から完全に開放した生活に身を置いたらどうなるかと設定したのがグリーン・ヴィレッジだ。

既存のサービスを組み合わせれば、グリーン・ヴィレッジのような居住施設もあながち夢物語ではないだろう。どちらかといえば、家事から完全に開放されるという精神性と行動に対し、各種のアレルギー反応が予想される。物語でも主人公は家事からの解放で仕事に趣味に恩恵をフルに授かるのだが、外からは懐疑の目を向けられている。事実グリーン・ヴィレッジで家事をせずに暮らせる裏には、相応の労働者や機械に支えられている。

家事はとてもパーソナルな問題でありながら、社会と接続して考えなければならないし、社会と接続して考えられるともいえる。物語は終盤、主人公の家事に対する価値観を植え付けた実家で、母が家事の意味を拡張しソーシャル・グッドな価値を生み出す姿から、家事のひとつの可能性を示している。ただし主人公は、一度手にした家事をしない生活にこそ価値を感じ、30 年の月日を研究に捧げ、家事の根幹治療、家事の原因となる汚れやゴミそのものをテクノロジーでなくすマッドな道を選ぶのだが……どちらの姿も、あり得るかもしれない新しい家事のカタチなのではないだろうか。

箱舟　解説 2/2

ストーリーを通じて新たな問いを考えるための３つの視点

物語を作成するにあたって用いた＜**想像力**＞＜**文脈的理解**＞＜**批判的視点**＞の三点から、「新しい家事の意味」の可能性が拡がることを期待して、読者それぞれが新たな問いを生み出すための視点を提案する。

〔1〕想像する：世界観を創造する、想像力を膨らませる

家事の意味を調べれば、日常生活そのものを指すとする向きもある。すなわち家事の新しい意味を考えるとなると、いまとは違う日常を考える、あるいは日常の意味を書き換えることになるのだろう。家事のない世界にはどんな日常が在るのだろうか。グリーン・ヴィレッジはひとつのアプローチに過ぎない。

〔2〕文脈を生む：主人公の一つの感情やそれによって起こる行動を中心に考える

失ってはじめて気づくのは、元カレや元カノへの愛だけではない。もし家事から解放したら、あなたは、あなたの家族はどんな行動を取るだろうか。「これ」という答えではなく、戸惑ったり、慣れたり、満喫し、葛藤に向き合い、それは変化として現れるはずである。主人公の行動や心情の変化にイシュー（今回でいえば「新しい家事の意味」）を重ねれば、そのものの見方が社会にどう受け入れられるのか、もしくは拒否されるのかを考えることにもつながるだろう。

〔3〕批判的に捉える：主人公のナラティブに外から干渉する

上記二つの物語に対する視点は、イシューを拡げ、深めるような意図があるが、内発的なプロセスの蓋然性を測るには批判的な視点が欠かせない。主人公のナラティブへ、同じ世界の別の立場からのまなざしを向け、主人公に語り掛けてみると、ひとりきりでするのとは別の深さの内省が行えるかもしれない。

© 2020 INFOBAHN DESIGN LAB.